平成３０年１月２３日

富岡市下黒岩高林城確認遺物のかわらけについて

富岡市立黒岩小学校　永井　尚寿

１　確認当初の記録

確 認 日　平成２９年４月９日午後４時頃

確認場所　高林城本曲輪上に鎮座する江戸期の石宮に上向きに置かれ、皿の見込み部に５円玉１枚、１円玉２枚の計７円が添えられていた。

初　　見　底部左回転糸切りが確認でき、形状から城と同時期のかわらけと思われた。口縁部にタール状の黒色付着物が確認でき、灯明皿の使用痕跡を認める。

２　遺物実測

実 測 日　　平成３０年　１月１９日、２０日

実 測 者　　永井　尚寿

実測方法　　断面図　真弧による手実測

　　　　　　平面図（上・下）デジタル写真をもとに画像編集ソフトにより作図

底部拓本　　富岡市文化財保護課第２文化財事務所にて永井がとる

写真撮影　　デジタルカメラによる

３　観察表

|  |  |
| --- | --- |
| 器種 | かわらけ |
| 焼成・色調 | 酸化焰焼成　内：にぶい褐色　外：にぶい褐色 |
| 残存状況 | 完形　口縁部内側表層の剥離がみられる |
| 法量 | 口径8.7cm（口縁端部径8.5cm）器高2.0cm　底径5.1cm　重さ62.2ｇ |
| 胎土 | 非常に細かく砂礫を含まない。0.2mm大の黒色岩片、0.1mm大の片岩（絹雲母片岩か）らしきものをわずか含む。 |
| 成・整形技法の特徴 | 外：回転ヨコナデ　底部：糸切り（ロクロ左回転）　内：回転ヨコナデ　見込み部：ナデ調整 |
| 備考 | 口縁端部から内側にかけて７/８周ほど黒色タール状の付着物有り。底部外周付近がややすれた感じがある。 |

４　考察

　・丁寧に作られている。

　・タール状の付着物の様子から灯明皿として使用された物と考えられる。

　・底部外周付近がややすれた感じがあることからも器の使用痕跡を感じられる。

・断面の様子と成・整形の技法の特徴から中世のかわらけと判断できる。高林城は堀切や曲輪をもつ形状から戦国時代の山城と思われる。かつて発掘調査を行った丹生東城の遺物等との比較からこれに近い時期と考えられ、総合して１６世紀の遺物と思われる。